

野草を学ぶ

ここまで、日本ならではの野草と、外来植物との関係を説明させていただきました。

普段、何げなく歩いている道端や何げなく眺めている景色には、私たち人間が想像だにしなかった絶妙なバランスと一定の秩序の中で、自然の営みが繰り返られているのです。

外来植物の繁殖を抑え、日本の野草を守ること...それは、私たちが住む、この日本の豊かな自然を守ることにつながるのではないのでしょうか。足元でけなげに咲いている野草たち。まずはそのきれいな姿に、目を向けてみてください。

日本の野草と 外来植物



ハハコグサ(ゴギョウ)



ナズナ



シチダンカ



ハコベ

春の七草たち

みなさんは、野草と聞いて何を想像されますか？
分かりますか？
七日の七草がゆ行事でおなじみの「春の七草」などがありますね。
この日本ならではの野草に対して、外国から日本へ渡り、そのまま日本の国土に定着した外来植物があります。これらの繁殖力は非常に強く、本来の生態系への悪影響も少なくありません。そのため、大本の聖地では、そういった草花が繁殖しないよう、除去を心がけています。
では、外来植物にはどのようなものがあるのでしょうか。日本の野草との関係も合わせてご説明いたします。



みろく博士

大本本部

綾部・梅松苑 綾部祭祀センター
〒623-0036
京都府綾部市本宮町1-1 梅松苑 / TEL 0773 (42) 0187

亀岡・天恩郷 亀岡宣教センター
〒621-8686
京都府亀岡市天恩郷 / TEL 0771 (22) 5561

東京本部 東京宣教センター
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44 / TEL 03 (3821) 3701

大本ホームページ <http://www.oomoto.or.jp/>



<連絡先>



外来植物とは？

外来植物とは、人為的な手段で日本国内に持ち込まれた植物のうち、野外で自生するようになった植物のことです。意図的に持ち込まれたものと、そうでないものが含まれます。意図的でないものとしては、海外からのさまざまな資機材や、人の移動の際の手荷物などに種子が付着し、持ち込まれるケースです。

対して、意図的であるものは、人が栽培植物として持ち込んだものが、野外へ拡散してしまった場合などがあります。

日本の野生植物、約七千種のうち、外来植物は約千二百種あるといわれています。これらの外来植物の特徴として、主に、人為的にかく乱された場所に侵入し繁殖するということがあげられます。例えば、都市部のさら地などでは、放置すれば外来植物ばかり生えてくるという現象は少なくありません。

このことから、外来植物の繁殖は、自然、あるいは生活環境と大きな関わりがあることが分かります。

それでは以下に、私たちがよく見かける主な外来植物を紹介していきます。

ヘラオオバコ

ヨーロッパ原産の多年草で、耐乾性があるため、道端や河川敷、牧草地などに広く生育します。繁殖力が強く、農耕地などに侵入すると、農作物との競合、または駆逐の恐れがあります。開花期は4～8月で、花粉症の原因植物にもなっています。「要注意外来生物」に指定されています。



ヒメムカシヨモギ

北米原産、キク科の二年草。日本では明治時代に確認された外来植物です。道端や荒地に多く生える雑草で、明治維新のころから鉄道線路に広がったため、テツドウグサ（鉄道草）、ゴイッシングサ（御一新草）、メイジソウ（明治草）などとも呼ばれていました。1.5mほどまで成長し、茎と葉には白い毛が生えています。



このような花をたくさん付けます

セイヨウタンポポ

自然度の高いところに侵入すると、在来種を駆逐する恐れがあるので、長野県上高地や北海道礼文（れぶん）島などでは駆除が行われています。総苞（そうほう）が強く反り返っているのが主な特徴ですが、最近では、在来種と外来種が共生することにより雑種が生まれ、区別がつきにくい場合もあります。



総苞

セイタカアワダチソウ

北米原産の多年草。土手や荒地に大群落を作り、50cm～2.5mほどにまで成長します。在来種をよせつけず、ススキなどの群落に侵入してゆきます。地下茎があり完全除去は難しいため、カシやツバキなどの常緑広葉樹を植え、生育しづらい環境を作ることも、繁殖を抑える方法の一つ。ヒメジョオンと同じく、「要注意外来生物」に指定されています。



ヒメジョオン

北米原産の越年草。畑、庭、荒地など、いたるところに生え、しばしば群落をつくります。在来植物を侵してしまうため、希少な植物が多く生育する国立公園などでは問題になっており、「要注意外来生物」に指定されています。50cm～1mほどの高さまで成長し、白い花を咲かせます。繁殖は種子によるので、開花前に除去するのが好ましいでしょう。



ブタクサ

北米原産の一年草。道端や荒地に多く、1mほどの高さまで成長します。花粉症の原因となる植物として知られ、日本ではスギ、ヒノキに次ぐ患者数が存在するとされています。開花前の夏に刈りとり、種子を付けさせないようにしなければなりません。これも、「要注意外来生物」となっています。より大型のオオブタクサも同様です。



7m7m、よく見かける草たちじゃのぼ

自然環境と外来植物



前ページの説明のように、外来植物の繁殖には、自然や生活環境が大きく関わっています。外来植物は、工事現場や工場排水で汚染された土地など、自然状態を極度に破壊した場所に侵入し、繁殖していきます。そのほか、港や空港、工場や駅など、外国との物資の出入り口となる場所にも多く見られます。

逆に、古くからの雑草が生い茂る農村や、自然環境がより良い形で保存されている場所は、外来植物にとつて侵入が難しく、繁殖しづらい環境といえます。

私たちの身の回りではこれら外来植物が生い茂るといことは、それほど自然環境が壊されている、もしくは破壊されつつあるということなのです。